

“令和発刊第1号” 記念 父子対談！ サイカパーキングの過去～未来を語る

森井
清

サイカパーキング株式会社代表取締役社長



森井
博

『自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス』誌 発行人



【プロフィール】

森井 清 (もりい きよし)

1968年4月12日生まれ。1993年東海大学大学院体育学研究科卒業後、外資系保険会社を経て2002年に日本駐車場救急サービス株式会社入社。2005年同社代表取締役社長就任。2014年モーリスコーポレーション株式会社代表取締役社長就任。2008年サイカパーキング株式会社監査役就任。2016年同社代表取締役社長就任し、現在に至る

1962年に創刊された本誌は、今号で通巻690号となった。1962年は和暦で昭和37年。パーキングプレスは「昭和」「平成」そしてこの5月からの新元号「令和」と、長く3つの時代を経ることとなった。半世紀以上にわたって発行し続けてこられたのは、ひとえに関係諸氏、読者の皆様のご協力あってこそであり、改めて深く感謝を申し上げる次第だ。

さて、新しい時代に入って最初の対談の相手は、私の跡を継いでサイカパーキング株式会社の第4代社長を務めている実子・森井清。当社は2017年に創業40周年を迎えており、自転車駐車場運営管理の世界では老舗、トップランナーであると自負している。清社長が打ち出す指針は、今後、この業界に少なからず影響を与えるはずだ。であるならば、新たな時代に入った今、サイカパーキングの現社長の考えを発信するのは、意義のあることだと考えた。

ただし、いつもと勝手が異なる“父子対談”。今回は趣向を変えて、弊誌編集長に進行役として参加してもらいながら、ざっくばらんに語り合うこととしたい。

(対談収録：2019年4月12日)

バブル崩壊が始まった年に 社長に就任した父を 息子はどう見たか

——まずはサイカパーキング株式会社発足の経緯を聞かせていただけますか。

森井 博 創立は1987年1月24日。当時の社名は、建設省(当時)の都市局都市再開発課にちなんだ「再開発振興株式会社」でした。初代社長は私とは1964年の東京五輪以前から親交があった稲垣信一郎氏です。私は当時、石川島播磨重工業(現IHI)で立体式機械駐車場の営業販売を行うサラリーマンでしたが、再開発振興株式会社の立ち上げの時から当社が発行しているパーキングプレスの記事や広告や研修会の講師などに

協力していました。

——本業をもちながらの二刀流だったわけですね。

森井 博 そういうことになりますね。創立当初は自動車駐車場の総合企画コンサルタント事業が主でしたが、創業二年目の1978年には自転車駐車場管理の仕事が始まりました。東京・葛飾区の京成立石駅前の自転車駐車場管理を受託したことがきっかけでした。

——当時は全国的に放置自転車問題が深刻化していました。自転車駐車場管理業への本格的な参入の背景にはそのこともあったのでしょうか。

森井 博 それもありますが、1979年に財団法人自転車駐車場整備センターが設立されたことも大きく関与しています。当時、国は放置自転車対策として公益法人の設立を考え、稲垣氏に相談を持ちかけてきました。それを受けて稲垣氏は、私や後に当社の専務として活躍することになる、当時住友商事勤務の石井^{きとし}恵氏に協力を求めてこられたのです。詳細は長くなるので割愛しますが、整備センター設立後、同センターの首都圏における自転車駐車場の管理を当社が受注することになり、これが自転車駐車場管理本格参入の足がかりとなったのです。——そして1991年(平成3年)にサイカパーキング株式会社の第2代社長に就任。当時はIHIから東芝に移っており、そこからの転身でした。

森井 博 稲垣さんから「私は再開発振興を当初の10年引き受ける。11年目からは森井さんに頼む」と言われており、その約束を守った形です。

——1991年といえば、バブル崩壊が始まった年とされています。そうした激動の時代に会長は人生の大きな転機を迎えたわけですか。清社長の目にはどのように映りましたか。

森井 清 あの頃、私はまだ大学生でした。父が再開発振興の前に勤めていたのは、日本人なら誰でも知っている大

企業であり、そこで仕事をまっとうしていくのだろうと想像していましたが、「駐輪場を運営管理する会社の社長になる」と聞いた時はかなり驚いた記憶があります。当時、私は駐輪業に対して何の知識もなく、商売になるのだろうかと少し心配もしましたね。ただ、強く覚えているのは、会長が「俺は自分の人生において『社長』になり、社長として会社を牽引してみたいんだ」と話していたことです。働く男として明確な目標があり、それを叶えるチャンスがあるのなら陰ながら応援しようと思っていました。その後に自分がその立場になる日が来るとは、全く考えていなかったのですが(笑)。

——清社長は東海大学の大学院で体育学を専攻していますね。ゆくゆくはスポーツに関連した仕事に就くことを希望していたのですか。

森井 清 中学時代に始めた陸上競技でお世話になった恩師に強い影響を受けており、自分もあの先生のような体育教師になりたい、という夢を持っていたのです。

森井 博 元々、社長は野球少年だったんですよ。小学3年生の頃、地元の野球少年団に入り、中学まで続けていました。陸上競技は中学生からで、あくまで野球のトレーニングの一環として始めたのがきっかけで。

森井 清 そうです。ただ、そうして始めたトラック競技(400m、800m、1500m)の都大会や関東大会で好成績を残し、いつの間にか野球より陸上競技にのめり込んでいきました。高校でも陸上競技を続けて、インターハイにも出場できました。

——会長も高校時代は短距離、やり投げの選手としてインターハイに二度出場しています。社長の陸上選手としての才能は父親譲りなのでしょう。

森井 博 まあ、そういうことかもしれないね(笑)。



日本駐車場救急サービス入社時は自己裁量権の大きさに驚いた

—大学院修了後は、外資系保険会社で約10年間営業職として働いた後、2002年にサイカグループの日本駐車場救急サービス株式会社に入社、パーキング業界でのキャリアがスタートしました。これは博会長の薦めもあったのですか。

森井 博 営業職として人に頭を下げ、仕事をいただく。一定期間こうした環境で経験を重ねることで社会勉強をしてから私のあとを継いでほしいと考えていましたので、日本駐車場救急サービスへの入社が決まった時は感慨深いも

のがありました。

—それまで清社長は外資系保険業界で、いわば「結果第一」の世界で生きてきました。パーキング業界はずいぶん勝手が違ったと思うのですが。

森井 清 保険業界とは全くタイプの違う人が集まっている世界、というのが率直な印象でした。保険業界では、少なくとも私が身を置いた世界では、良くも悪くも上司の言うことは絶対でしたが、日本駐車場救急サービスで働いている人たちは、かなり大きな自己裁量権を与えられていて、自分の責任においてやるべきことをまっとうしている感じが非常に新鮮でした。入社・退社時間が一律でないなど、保険会社時代には考えられませんでした。夜間や早朝に勤務を分散しているなどフレキシブルに働いていました。仕事の性質上、対応する時間はまちまちなので当然なのですが、とにかく当時は驚きが大きかったですね。

—当時、日本駐車場救急サービスの社長を勤めていた博会長に対してはどのような印象？

森井 清 当時はまだ従業員数が少なかったからかもしれませんが、ひとりひとりの社員をよく観察し、体調から精神面に至るまでしっかり把握しているな、という印象がありました。

森井 博 人がしゃべっていることは顔面どおりに受け取れないこともあります。

「本音と建て前」と言うことや極端かもしれないませんが、経営者たるもの、社員が心の奥底で何を考えているのか、何をしたいと思っているのかを推し量る力が必要です。この考えは現在に至るまで変わっていません。

—博会長のそういった「経営者像」、経営者としてのあり方などについて、清社長に明確に言語化して伝えることもあるのですか。

森井 博 いや、一切言っていません。社員の内実を把握し、それにどのように対応するかは、言っても分かることではない。やはり経験を積み重ねて体得するしかないのです。

森井 清 この業界に入ってほぼ10年、最近、ようやくその意味がわかってきました。社員の心身の状態を推し量り、直接話をしてみて自分の想像が間違っていなかった、という場面が増えてきましたね。

親族内承継成功のコツは先代の実績に固執しないこと

—今の話に連動して「事業承継」について聞かせてください。事業承継がビジネス界の注目を浴びて久しい中、ここまでの話でも触れてきましたが、サイカパーキング株式会社は、親族内承継が順調に行われ、企業としての成長が存続し

サイカパーキングの取り組み ①



① 自転車駐車場の有人管理に就くスタッフは「接客業」であるというのはサイカパーキングの考え方。「接客マナー日本一の実現」を合言葉に、充実した教育研修制度を採用。高齢者人材の育成に取り組んでいる
② 所定の位置に駐輪する、美観に留意するのはもちろん、これからはコンシェルジュ的な対応など、さらに高度なサービス意識が求められる

ている成功例といえます。ケーススタディとして、その理由について探りたいのですが。

森井 博 ほとんどの親は何らかの形で子どもに自分の跡を継いでほしいと考えていると思います。ただ、本当に継いだとして、その後が親のイメージどおりに進むかどうかまでは分からない。でも、私はそれで良いと考えています。ある程度は本人に任せてしまわなければ承継とは言えません。いろいろと口出しをしてはいけない(笑)。

—清社長の印象としても、実際にあれこれ言われず任されている、と？

森井 清 そうですね。稀に他の人を介して遠回しに「あれはどうなってんの」みたいに聞かれることはありますが(笑)、基本的には今の会長の言葉どおり、自由にやらせてもらっています。サイカパーキングには40年以上培ってきた伝統があるので、受け継ぐべき点はきちんと守りつつ、一方で変えるべきところは大胆に変えていく。このバランスを取りながら進めていくのが私の役割だと考えています。極論すれば「失敗しても後からいくらでも取り返すことはできる」。自分が決めたことが正しかったのか失敗だったのかは、時間が経ってみないと分からない面もあります。むしろ、失敗を恐れて二の足を踏むことのほうが意味損失といえるかもしれません。

森井 博 せっかくの対談の機会なので言わせてもらおうと、社長はもっと力を抜いて良いんじゃないかという気はしています。ゴルフに例えるなら、打つ時に力が入り過ぎてOBが出てしまいそうになる感じでしょうか。力を抜いて70～80%くらいの力で打ったほうがいい打球を飛ばせるのと同じで、力を抑えて臨んだほうが、結果的には良かったりするケースも多いと思います。まあ、これもさっき話した「社員の内実を見る眼力」と同様、経験を積まなければ身に付かないのかもしれませんが。

森井 清 心得ておきます。

—清社長から「伝統を受け継ぎつつ、変えるべきは大胆に変える」との話がありました。伝統と変革の具体的な中身を教えてくださいませんか。

森井 清 まず伝統については、具体的には「有人管理」です。多くの高齢者を雇用し、自転車駐車場管理の業務にあたっていただくことで社会的にも意義のあることを重ねてきました。超高齢化社会に突入し、高齢化が加速する時代において、高齢者による有人管理の伝統は今後も守るべきものだと考えています。次に変革ですが、これは人手不足や最低賃金の上昇などの問題から導入すべきだと考えている「機械化」です。機械化を進めることで、有人管理に当たる従業員に支払う賃金や研修内容を向上させ、結果、有人管理の質を上げることにつながると考えています。つまり、有人管理と機械化の融合です。

森井 博 その方向性は私も異議なしです。5年先、10年先を考えれば機械化は避けられませんが、当社だけでなく業界全体の流れでもあります。ただ、有人管理について補足するなら、人に求められることが今までよりもハイレベルになる傾向は強まると考えています。自転車駐車場場で自転車を所定の位置に並べる、美観を保つのはもちろん今後も同様ですが、加えて何らかの付加価値となるサービスの提供や、コンシェルジュ的役割などが必要になるかもしれません。

「予約制」と「一時利用」のバランスを保つことが大切だ

—前号の石井国土交通大臣との対談では、「まちのにぎわい創出のためには、駐車場を中心エリアの外側に集約するなどの対応が重要」との意見が聞かれました。国交省が推進しているコンパクトシティ+ネットワークでも駐車場の集約化



がうたわれており、新たな時代ではますます駐車場のあり方が転換を迫られると思います。

森井 博 集約化の流れはあるのですが、お客様の利便性を考えれば、本来は駅前、まちなかなどに分散しているほうが理想的だとは思っています。やはり目的地のそばにクルマを停める場所がある方が便利ですからね。また、集約化することでまちなかでクルマと歩行者の歩車分離がしやすくなるとの意見もあります。確かにそうなのですが、私見では、人間は元来器用であり、まちなかに駐車場が分散していても、歩道、歩行者の安全はそれなりに担保されると考えています。

森井 清 駐車場のあり方に柔軟性を持たせることは大切だと思っています。例えば、土日祝日は入庫待ちの渋滞が起きているけれど、平日はガラガラになってしまう駐車場もありますよね。ならば平日は、駐車場の一角を異なる用途に充てるなどのプランがあってもいいかもしれません。

森井 博 これからの駐車場のあり方といえば「予約」も重要なキーワードになります。過去の特集対談でもたびたび話題にしましたが、最近、いよいよ身近なものになりつつあることを実感しています。

—今年秋からのプレサービス開始が見込まれている5Gが本格的に普及すれば、

IT、IoTの技術もさらに進歩します。そうなれば駐車場も進化することになるでしょうね。

森井 博 例えば東海道線はかつては指定席車両はわずかで、大半は自由席車両でした。だから皆は早めに駅に行ってホーム上に長い列を作ったものです。それが新幹線になった今では指定席車両の方が圧倒的に多いどころか、全席指定も珍しくありません。この現象は駐車場の世界にも近い将来訪れるのではないのでしょうか。さらに言えば、自転車駐車場の一時利用にも予約制はどんどん導入されていくと思っています。

森井 清 私も利用したことはありますが、予約制のパーキングは確かに便利です。空き駐車場を探しているドライバーを横目にスッと駐車できることは優越感さえ感じさせます。ただ、すべてが予約制になるというわけではなく、自分の予約したい車室が先に埋まってしまった、時間どおりに来れない、予約が必要なほど長時間駐めるわけではない、といったことも多いだけに、従来のフリーな一時利用車室も残しておく必要があ

ると思います。その場所の駐車場ニーズに応じてバランスを保つことが大切ですね。

新時代の ニュービジネス確立に向け 第4次中計策定に若手を積極登用

——都内では特にビジネスユースの利便性が認知され、東京10区シェアサイクルが注目されています。サイカパーキングもこれまで数々の社会実証実験参画や、現在進行中の神戸「コベリン」などシェアサイクル事業に積極的に取り組んでいますが、今後の展望はどうでしょう？

森井 清 当社としてシェアサイクルの普及を後押しする使命を果たしていきたいと考えているのは確かです。ただし、正直に言えば民間だけで採算を上げるのは難しいのも事実です。行政との連携を深め、何とかウィンウィンの関係を築いていくことが大切だと思っています。

森井 博 シェアサイクルの役割は、公共交通機関と目的地とをつなぐ最後のアプローチに使う「プラスワンマイル」の移動

です。役割は大きいのですが、社長が言うとおり、民間だけでそれを担うのは厳しい場合が少なくありません。観光地が集積しているなどニーズが高い一部の地域を除くと、採算ベースに乗せるのは難しいと言わざるを得ないでしょう。ただ、当社が千葉の幕張や神戸で既に実行していますが、既存の自転車駐車場の一部をシェアサイクルのポートに充てる方法は有効だという手ごたえを感じています。

——では最後にサイカパーキング株式会社の将来展望について聞かせてください。

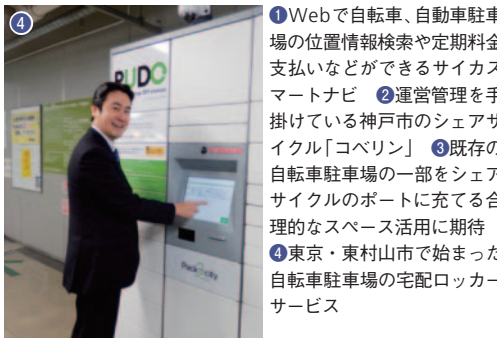
森井 清 今年4月から第4次の中期経営計画を実行に移しています。その策定にあたっては20～30代の若手社員を多く登用しました。なかなかユニークな視点が多く盛り込まれていて、例えば「会社の理念から見直す」という発想はこれまでになかったものです。「サイカパーキングは非常に社会貢献度の高い企業である」から「継続的に成長が必要」で、そのためには「中で働く社員が働き甲斐を感じられる職場でなければならない」といった考えがベースに盛り込まれて、これは良いと感じました。いまどきの若

者はとかくこらえ性がない、自分の興味のない分野には深入りしたがるなど、と揶揄されがちですが、今回の中計策定を経て、当社の若い世代は決してそんなことはない、いろいろなことを考えているのだという発見や手ごたえを得られたのは大きな収穫でした。

——中計策定に若手社員を登用しようと考えた背景は何だったのですか。

森井 清 若手社員から「終業後、勉強会をやりたい」という声が出たことが発端でした。私は、それは意義のあることだから終業後ではなく就業時間中に実施す

サイカパーキングの取り組み ②



- ① Webで自転車、自動車駐車場の位置情報検索や定期料金支払いなどができるサイカスマートナビ
- ② 運営管理を手掛けている神戸市のシェアサイクル「コベリン」
- ③ 既存の自転車駐車場の一部をシェアサイクルのポートに充てる合理的なスペース活用に期待
- ④ 東京・東村山市で始まった自転車駐車場の宅配ロッカーサービス

べきで、実のある会にしてほしいと感じました。結果、期待以上にユニークな発想が多く、彼らの視点を次の中計策定に活かしてもいいのでは、と考えたのです。

森井 博 ベテランは経験をもとに結果を先読みしてしまうもの。経験上いけそうと思ったら積極的に進めますが、可能性が低いと判断したら、それ以上の努力はあまりしない傾向があります。ただ、注文を取ろうとしている本命の人からは取れなくても、意外にもその隣にいる人が興味を示してくれる、という場面がビジネスにはままあります。若手は経験が少ない代わりに妙な先入観もない。その一方で、ベテランが培ってきた経験は、ベテラン社員しか持ち得ない大切な財産です。

森井 清 若手とベテラン、その両方の「財産」を持っているのが伝統ある当社の強みです。
— 新たな中計では、先ほど社長が指摘した有人管理と機械化の融合が柱になっていくのでしょうか。



二人とも血液型はB型。「お互いに頑固、気が短い一方で、納得さえすれば素早く方針を転換できる点は似ていると思う」(森井 博会長)

森井 清 おっしゃるとおりですが、そこに加えて人的資源や40年超の歴史で培ったノウハウを活用したニュービジネスの確立も目指します。また、業界内のアライアンスにも注力したいと考えています。企業によって異なる強みを情報共有し、共存共栄を目指したい。自転車駐車場業界では、ひとつの企業が独り勝ち

するというのはそぐわないこと。勝ち組、負け組の格差が生じるのは、業界全体の衰退につながりかねません。
— その路線を進めることで業界内の横の風通しが良くなれば、業界の体制が強固になり、業界全体に好影響がもたらされることでしょうか。令和の新たな時代も、引き続きよろしく願い致します。 **PP**

【パーキングプレス 発行人】 **森井 博** のプロフィール

- 一般社団法人 日本パーキングビジネス協会 理事長
- 一般社団法人 自転車駐車場工業会 会長
- 一般社団法人 日本シェアサイクル協会 専務理事
- 東京京橋八重洲ライオンズクラブ 会員
- 六本木男声合唱団 団員
- サイカパーキング(株)、日本駐車場救急サービス(株)、モーリスコーポレーション(株) 夫々代表取締役会長

【略歴】 1938年(昭和13年)宮崎県延岡市生れ80歳。
1957年(昭和32年)石川県立金沢泉丘高校卒
1961年(昭和36年)東京商船大学(現東京海洋大学)卒
1961~1979年 石川島播磨重工業(現:IHI)
1979~1991年 東芝
1991年~ 現職

【趣味】 現在: ゴルフ・車・自転車・歌・仕事
過去: 水泳・野球・陸上競技・テニス

【遍歴】 ゴルフ: 毎週1回ホームコースでラウンド、週1~2回練習場通い。車: 毎日通勤で運転。中古車3台を大切に乗り廻す。自転車: マツダレベル、プリチストンモールドン、プロンプトン他数台保有するも年齢を考え余り乗らない。歌: 六本木男声合唱団でロクに楽譜も読めないのに毎週練習に励む。'17年11月にはローマ、パチカン市国の大聖堂でミサ合唱。'18年6月にはニューヨーク・カーネギーホールで14曲合唱。仕事: 健康のため平日は毎日9:00~17:00出勤。但し、土、日、祝日は絶対に出社しない。水泳: 漁港で漁師の子供達と一緒に育ったため、小学校に入る前から泳ぎは得意。野球: 中学生までは本気でプロになるつもりであった。元西鉄ライオンズ 故・稲尾和久投手、完全試合投手 田中勉、元巨人 淡河弘捕手は友人。巨人監督 原辰徳氏の父 故・貢氏も友人で辰徳監督のボクサー犬が産んだ子犬を買った仲。陸上競技: 高校時代 短距離、やり投げ、インターハイ2回出場。東京陸協元会長でオリンピック3回出場の大串氏とは友人。テニス: 元デ杯選手 本井満氏のコーチでかなりの腕前(?)になるも、45歳時アキレス腱断裂でウィンブルドン出場(?)断念。

過去の対談ゲストの方は、WEBでご紹介しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

対談記事のバックナンバーもご覧いただけます。

